

# なぎさ NEWS



## 「西なぎさ」に生息するマガキ

春から初夏にかけて、大潮の干潮時には日中に潮位がとても下がるため、干潟で生き物を観察するには絶好のシーズンです。4月下旬に「西なぎさ」において干潟の生き物の観察会を行いました。大きなマガキの群集がいくつも見られ、以前より増えている印象を受けました。

マガキは日本周辺の汽水域や沿岸に生息する二枚貝で、「西なぎさ」では、泥が堆積している場所で多く見られました。マガキは、アサリやマテガイなど干潟でおなじみの二枚貝とは異なり、砂や泥にはもぐらず、干潟の表面で貝同士がくっつきあって生息場所をひろげていきます。大きく成長した群集はカキ礁といわれ、水質の浄化や波の力を抑える効果があります。一方で、干潟の表面を広く覆うため、カキ礁をすみかとする生き物が増えるなど、まわりの生物相が大きく変化する可能性があります。今後、「西なぎさ」の干潟の環境がどのように変化していくのか、注意深く観察を続けていきたいと思えます。

ところで、マガキの貝殻は硬くて鋭いので、観察するときは軍手の着用をおすすめします。また、ふみつぶしてしまわないようにしましょう。(教育普及係 佐藤 薫)



「西なぎさ」で見られるマガキ

## 「西なぎさ」は東京湾のゆりかご



子どもの時期を干潟などで過ごすボラ

「西なぎさ」で小型の地曳き網を使って行っている生物調査では、特に春から夏にかけて、色々な種類の魚の子どもがみられます。4月中旬に実施した地曳き網調査では、ボラ、スズキやイシガレイのほか、アジシロハゼなどハゼのなかまの子どもを確認しました。このように魚のなかには、子どもの時期を干潟で過ごし、成長にともなって沖へ出ていくものがあります。

魚の子どもにとって干潟は、過ごしやすい環境が整っているのでしょう。まず、水深が浅いため、捕食者の大型魚が入ってくることはありません。また、海底まで日光がとどくことにより、微小な藻類がよく育ち、その藻類を食べる小動物が増えるというふうにより、エサとなる生き物が豊富です。魚の子どもが成長する場所として、干潟は大切な役割を担っていると考えられています。

東京湾奥の数少ない干潟である「西なぎさ」は、東京湾にくらす魚の子どもを育てる大切なゆりかごとなっているのです。(調査係 君島 裕介)

## なぎさ 生き物ミニ情報

水族園は「西なぎさ」と「東なぎさ」で、さまざまな調査を行っています。今回は、3月と4月に行った生き物調査と4月に行った地曳き網調査の結果をお伝えします。

春になり、干潟の生き物たちが活発に活動をはじめています。また、海の中でも生き物の種類、数ともに増えて、にぎやかになってきました。

**3月生き物調査:** 水温 17.9℃、気温 17.0℃。1月の調査に続き、この日もクロツラヘラサギが飛来していました。また、潮だまりでは着底して間もない全長 1～2cm のイシガレイが多く観察できました。

**4月地曳き網調査:** 気温 18.0℃、水温 20.0℃。春の西なぎさは、毎年魚の子どもたちが多く見られます。4月16日の地曳き網調査では10種ほどが採集され、毎年出現するスズキやボラは2回で50匹以上が網に入りました。

**4月生き物調査:** 水温 18.4℃、気温 20.0℃。春らしく暖かな天気の中での調査でした。オサガニやヤマトオサガニ、コメツキガニなど「西なぎさ」を代表するカニたちの活動が活発になりはじめました。甲幅が数mmの今年生まれと思われる個体も観察できました。